



梅雨に思う

忱 淳

(訳 萩田麗子)

私の故郷は中国の江南^①で、六月は梅雨の季節だ。以前は、梅雨は私の故郷一帯特有の気候かと思っていた。「梅雨は初夏の淮河(わいが)流域一帯に常に現れる、かなり長く続くどんよりした雨の多い気候であり、この時がまさに江南の梅が黄色く熟するときなのである」、という、公式な定義とは言えないが定義のようなものがあり、それゆえこれを「梅雨」と読んだり「黄梅雨」と呼んだりする。

しかしながら東京にも梅雨があり、それも六月である。当然のことながら、これは地理的な位置と気候によって決まるものである。故郷の梅雨であれ東京の梅雨であれ、この季節は私の心に矛盾を感じさせる。好きにはなれないが避けることはできず、しかし楽しみもその中にある、のである。

故郷と東京は緯度にほとんど差がないところにあり、ゆえにこれは自然の地理的気候の法則に則っている。梅雨は、時には人々がまだ物心両面での準備ができ

ていないときに早くやってきたり、時には人々の予想に反してのんびりと遅れてやってくる。

ただし、時節がどうであれ、まるで二十四節気中のほかの節気同様、避けることはできず隠れることもできず、梅雨は必ずきちんとやって来るのだ。

故郷の梅雨の雨の勢いはほとんど凶暴と言ってもいいほどで、政府は早々と必要な洪水対策をいろいろと実施するが、たとえこのように手を尽くしてもいつも道路には水がたまり交通がまひし、堤防が流され田んぼが水びたしになってしまうことは少しも珍しいことではない。人々の日常生活に極めて大きな不便をもたらし、きわめて大きな損失をもたらす。

東京の雨の勢いは故郷ほどではないが、連続して何日も雨が降り続くことがよくある。ときにはずっとしとしとと降り続いて、空はどんよりとした灰色、空気はじめじめして不快感があり、出かけるのに不便なことは想像に難くない。このような天気を好きな者がいるだろうか。

しかし、よくよく考えてみると、梅雨は人々に多くの楽しみをもたらしてくれる。これは私だけの偏見かもしれないが。

故郷の人々は「口福 [おいしいものにありつく運]」を持っており、食べる幸せを享受するのが上手だ。楊梅^{ヤンメイ}②は梅雨の時節のすばらしい果物である。太湖の太浮の楊梅は東山の楊梅ほど有名ではないが、一つ一つ紫がかった赤い色をして、真ん丸でたっぷりの甘い果汁がある。買うときには手で触って選んではいけない。果汁が出やすいので人が触るのに耐えられないのである。

一目見るや口の中に唾が出てきて、口の中にそれを入れられない。楊梅の新鮮な果実は案の定おいしいのではあるが、故郷の人々はその貴重な価値をさらに知っており、糖楊梅干③を作ることもあるが、品質と風味ともに素晴らしい。このようにすると夏以外の春秋冬の季節にも楊梅を味わうことが確実に保

証される。楊梅酒を作ることもあり、楊梅と焼酎を2対1の割合にしてびんの中に漬け込むと、一か月もたたずにその色は有名な赤ぶどう酒にも負けぬほどになり、その味はすがすがしい香りのする甘い濃い酒になる。

さらにその薬用としての価値にも大いに感心させられる。生津止渴〔唾液の分泌をうながし口中の渴きを癒す〕、和胃消食〔消化不良改善〕、行気止痛〔気の流れをよくし痛みを止める〕、御寒解暑〔悪寒を抑え、暑さによる症状を解消する〕などなど。

子供のころの記憶がある。酒の好きな母方の祖父が、この季節に帰郷し親戚回りをしていたが、最初に口にするのが祖母の手作りの楊梅酒であり、それにこの時期の太湖の名物料理、チアンバイシャ 搶白蝦④、チンジェンバイユ 清蒸白魚⑤が加わる。それがどれほど美味しかったかは、すべて祖父の満面の笑顔の上に書かれていた。

故郷の人は楽しむのが上手で、梅雨の恩寵の楽しみを味わうのはさらに上手だ。水と遊ぶときは大人も子供も疲れを知らないように楽しむ。山に行って遊び水路に入って遊び、池のほとりに行って遊ぶ……恵山の山麓に黄公洞という名所があって、そこは山の激しい流れや滝を鑑賞するのにもってこいの場所だ。故郷の人々はここで水を見て水と戯れるのを「遊大水」と呼んでいた。梅雨の季節になり、山からの雨が流れ落ちようとする時になると、いつもここでは激流が飛ぶように流れ、玉のような水しぶきが飛び、耳を震わすような轟音がなり響き、その眺めは壮観である。

しかし梅雨の前半は、清らかな水が頭茅峰から谷にそってゆるやかにさらさらと流れ、その音は妙なる音楽の響きのようである。

何度もよみがえってくる記憶がある。友人と一緒に水遊びを楽しむためにそこに行き、ズボンの裾をまくり上げ靴下を放りなげ、思い切り遊び、遊びにふけて帰るのを忘れるほどだった。家に帰らなければならないときになってかばんと靴下がどうしても見つからない、ということがあった。今も景色はもとのままで

観光客は激増したが、故郷の人々の「遊大水」の楽しみは、増すことはあれ減ることはない。

東京の梅雨も心や目を楽しませてくれる。これは至るところで見られる紫陽花あじさいの花の功績に負うところ大である。私は紫陽花を偏愛している。紫陽花はめったに見られない色彩を変える花であり、短い一か月の開花の期間にその色がいろいろに変化する。土壌中の酸とアルカリの割合によって色の変化が同じではないのである。

庭に昨夜あった純白の丸い紫陽花が、今日はすでに紫がかった白に変化し、やや薄緑の混じった花になっている。私は後悔した。どうして花たちが色を変えるのを見張っていて見ようと思いつかなかったのか。

京王井の頭線沿線の紫陽花が美しいのは確かだ、百草園の紫陽花があでやかなのは確かだ——しかしどこに行こうとも、紫陽花のしなやかで美しい姿が見えるのも確かだ。こちらの小さな庭には手毬てまりのような紫陽花の花がいくつか咲いている、あちらの道端にも紫陽花が花開いている、数メートル先にも、数十メートル先にも、といったふうに。

しとしとと降り続く雨で憂鬱になっているとき、一日中頭を緊張させて家に帰ってくるとき、雨の中の花の笑顔があなたの目に入ってきたら、それでもあなたの心はまだ悶々としており、あなたの緊張はまだ続くだろうか？

どんよりと曇り、いつも雨が降り続く梅雨の季節に巧みに色を変えるこの花は、雨の季節にも人をいい気持ちにさせるために努力し、心をこめて自分を変化させ、雨の街の景色に装いを施してくれているのだ。だから私はあじさいを偏愛しているだけでなく、心に紫陽花への深い感謝の気持ちを持っている。

梅雨の季節に故郷に帰らなくなってからもう何年になるだろうか。楊梅を思い出すと口の中に唾が出てきて、欲しくてたまらなくなる。このようなとき私は、

東京の人々をまねて梅酒を漬け、故郷を恋しがる気持ちを抑えることができる。依然として「遊大水」の衝動も生じているが、このようなときには紫陽花が私にいくらかの快さと落ち着きを与えてくれ、心を満たしてくれる。

このとき私は手を合わせ、敬虔な気持ちで故郷と東京のために、「梅雨よ、静かにおとなしくやって来て、楊梅を更に甘くし、紫陽花を更に美しくし、人々をもっと楽しくさせておくれ」と、祈る。 (2009年6月20日)

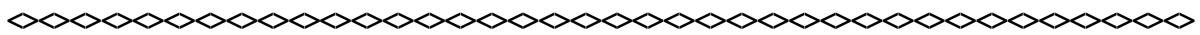
①江南……長江以南の地方の意。現在は下流南方のデルタ地帯の江浙平野一帯を指す。蘇州や無錫といった風光明媚な都市があることで有名である。

②楊梅……ヤマモモ科の常緑高木。雄花は黄褐色、雌花は赤色で、6月、7月に1.5センチから2センチぐらいの暗紅紫色で球形の果実が密生して熟し、食用、薬用に供す。

③糖楊梅干……砂糖漬けにした楊梅を乾燥させたもの。

④搶白蝦……太湖でとれる「白蝦」を生きたまま白酒に浸した料理。

⑤清蒸白魚……太湖でとれる「白魚」を蒸した料理。



(中国語原文) **梅雨所思** 忱淳

我的家乡在中国的江南，六月是梅雨季节。

原以为梅雨是家乡那一带独有的气候，因为有这么一个不是定义的定义：梅雨，初夏江淮流域一带经常出现的一段持续较长的阴沉多雨天气，此时正值江南梅子黄熟之时，便称“梅雨”也叫“黄梅雨”。

然东京也有梅雨，也是在六月。当然这决定于有地理位置和地理气候。无论是家乡还是东京，这个季节在我心里，是个让人矛盾的季节：爱之不能，

避之不可，乐也在其中。

家乡和东京在地理位置上看所处的纬度相差无几，因而因了这自然地理气候的规律。梅雨，有时在人们还没做好应有的心理和物质准备时就速速即来，有时又在人们的预期之外姗姗来迟。但不管怎样梅雨时节似乎也像 24 节气中的哪一个节气一样，避不开，躲不了，应时即到。

家乡梅雨季节的雨势大都凶猛，政府早早的就会出台诸多相应的防汛抗洪实施措施，即便是这样，路面积水、交通受阻、堤坝被冲、农田被淹的事常有发生，不足为怪。给人们的日常生活带了极大的不便，乃至遭受惨重的损失。

东京的雨势远不如家乡，却也常有连续不断的雨水倾注之日。有时一连多日淅淅沥沥地下个不停，天色灰蒙蒙，空气潮乎乎的让人感觉不爽，出行之不便可想而知。如此天气有谁能爱。

然，仔细想来梅雨也给人们带来诸多的乐趣。这也许是我的偏见。

家乡人很有口福，也会享受吃。杨梅，是梅雨时节的佳果。太湖边大浮的杨梅，虽不如东山杨梅那么有名，但也个个红里透紫，粒粒饱满，味甜汁多。买时不让用手挑，因为粒粒汁水欲滴，怎经得起触摸。

只需看一眼，便让你口中生津，忍不住要往嘴里送。杨梅的鲜果果然美味，但是家乡人更知道杨梅其它的珍贵价值，有制糖杨梅干的，品味极佳。

这样可保证夏季之外的春秋冬三季亦能品尝杨梅。有制杨梅酒的，杨梅和白酒以 2: 1 的比例，用瓶子泡上，不用一个月，那色不输给名红葡萄酒，那味儿清香甜醇。

更有那药用价值令人赞叹：生津止渴、和胃消食、行气止痛、御寒解暑等等。记得儿时，好酒的外公，这个时节回家探亲，第一口喝的便是外婆自制的杨梅酒，外加这个时令的太湖珍品：抢白虾、或是清蒸白鱼。那滋味的美呀都写在了外公笑盈盈的脸上。

家乡人很会找乐，更会享受梅雨恩赐的乐。玩水，大人孩子乐此不疲的玩，去山下玩，去水渠玩，去池边玩——惠山脚下有一名处——黄公涧，此

处是观赏山洪瀑布的好地方。

家乡人将来这里看水嬉水叫作“游大水”。每当梅雨季节，山雨欲来之时，这里便激流湍飞，玉珠飞泻，轰鸣震耳，景色壮观。

而梅雨前阵，一股清水便已从山上头茅峰顺涧缓流而下，潺潺的流水声，犹如美妙的乐曲。记忆里多少次随友伴侣来这里嬉水寻乐，卷起裤管，扔掉鞋袜，好不痛快，流连忘返。

以至于真要回家之时却找不着书包和鞋袜。如今景色依旧，游人剧增，可见家乡人“游大水”的乐趣有增无减。

东京的梅雨也让我赏心悦目，这得归功于随处可见的紫阳花。我偏爱紫阳花，紫阳花是一种罕见的色彩易变的花，在短短的一个月花期里，它的颜色会产生许多变化，根据所施肥的酸碱，花朵的颜色变化不一。

院里昨晚的几朵纯白绣球，今天已变成紫白相映，略显淡绿的混合花了。我后悔呀，我怎么就没想到守着、候着、看着它们怎么变。

京王井之头沿线的紫阳花美不美，百草园的紫阳花娇不娇——，无论你走到哪里，这个小院有几个绣球露着，那个路边有几朵绽放着，甚至能说，几米外，几十米外就可看到它们婀娜的身影。

当你在淅沥淅沥的雨中烦闷，当你在脑神经绷紧了整整一天回家的时候，看到这张张雨中的笑脸，你的心情还会烦闷、你的紧张还会继续？阴雨绵绵的梅雨季节，就是这种善变的花，努力的，殷勤的变化着自己，装点着雨中街景，好让人们在雨季也能有个好心情。

为此我不仅偏爱紫阳花，更在心里对其存有一份深深的谢意。

多少个年头了，梅雨季节没曾回过家乡，想起杨梅依然口中生津，馋液欲滴，这时候我会学着东京人浸泡一瓶青梅酒，以了思乡之情。也依然会生“游大水”的冲动，这时候是紫阳花带给我的那份惬意和恬静，让我心满意足。此时我会双手合十，虔诚地为家乡和东京祈祷：梅雨呀你静静地来，柔柔地来，让杨梅更甜，紫阳花更美，人更快乐吧。

□□□